

町史のひとこま

(第九回)

道林寺所蔵の「無等和尚像」

福岡県文化会館の「博多承天寺展」をのぞいてみた。承天寺は、今は博多駅前林立するビルの谷間にあるが、古くからの

と。また、図録では、国宝や重要文化財とならんで、無等和尚

が、それは無等和尚像の賛からも裏づけられる。東福寺退耕庵(京都)の高僧性海靈見による画賛(絵に付したことは書き)に「道林開山無等和尚」という一節があるからだ。この賛は永徳元年(一三三二)の成立で、性海靈見の賛そのものも貴重なものである。

多くの末寺をもつ有力な寺院であった。開山聖一(国師)は、祇園祭りや博多織の創始とも伝説的なつながりがあり、博多の人々にはなじみ深いお坊さんである。この承天寺展には、須恵町甲植木の道林寺からも、道林寺を初めて開いた無等和尚の肖像画(禅宗で頂相と呼ぶ)を出品している。今からちょうど六百年前の賛をもつ、ずいぶん古い時代のものである。



600年前に描かれた無等和尚像

ただ古いというだけでなく、芸術的にもすぐれていることはこの展覧会の図録の解説でもふれている。顔の表情のとらえ方がていねいで「像主の温厚そうな人柄をよく描き出している。県下に伝わる頂相としてきわめ

像は色刷りのページをかざっている。私たち須恵町民が誇りにしてよい名品である。霊樹山道林寺は、臨濟宗(禅宗)東福寺派博多承天寺の末寺である。承天寺の第十二世住職無等以倫和尚が開いたとされる

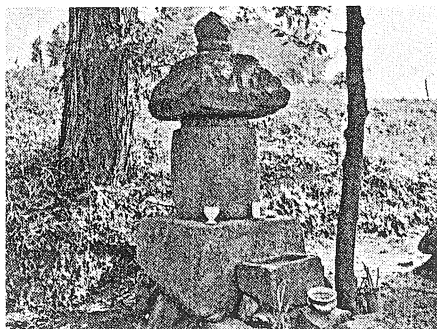
道林寺の創始は、一説に「文永八年(一二七一)」とするが、はっきりした裏づけを欠いている。鎌倉時代で、蒙古襲来前後の時期にあたっている。こうした古い由緒をもつ道林寺だけに末寺も多かったらしく、

塔頭(境内にある小寺)として知足軒・安養寺・福応寺・明星寺・西念寺・富好寺・四王寺の七つの寺の名が伝わっている。道林寺周辺に住む人々は、今でも西念寺・福応寺などと呼びあっているとのことである。多くの寺の例にもれず、戦国時代に入ると、道林寺の法燈も一時とだえていた。それを再興したのが、高鳥居城主杉氏で、境内の五輪の塔は杉氏の墓と伝えられている。

江戸時代に書かれた「筑前国続風土記拾遺」には「杉豊後守位牌として徽山紹猷大禅定門と銘せる有」と記されている。また幕末と明治に写されたらしい二つの過去帳は、この位牌の人物を杉弾正とするのは誤まりで、杉豊後守であろうと書いている。この杉豊後守は、おそらく連載第四回で書いた杉豊後守興運(弾正忠ともいった)のことだろう。興運は信心深い人で、若杉の千手観音がいたんで放置されていたのを修復し、堂宇を再興した話が現に伝わっているほどだ。

に幾度かの戦乱に焼け落ち無残となった道林寺を復興したのは心学宗功で、十七世紀のことである。寺宝「無等和尚像」が六百年の間、連綿として伝えられてきたのを見ても、法燈を絶やすまいとした禅僧や檀家の人々の努力のあとがしのばれる。(道林寺現住、貝野東憲師の協力を得ました)

(町誌編集委員会事務局、石瀧)



杉豊後守の墓か? (道林寺境内・昭和48年撮影)

